第３回高知県子ども読書活動推進協議会議事録

平成２５年９月２４日（火）10:00～12:00

高知県庁西庁舎２階教育委員室

１．開会

（１）高知県子ども読書活動推進協議会委員長挨拶

（２）委員紹介

２．議事

（１）協議

○「第二次高知県子ども読書活動推進計画」におけるＨ２５年度の取組（中間）について

～取組の進捗状況確認・助言、評価について～

【説明】第３章　Ｉ．子どもを自主的な読書活動へいざなうために

１．家庭における子どもの読書活動の推進について

【質疑・応答】

（委員）

家庭における子どもの読書活動の推進ということからすれば、先ほども委員長からお話があったように、やはり親が本を読む姿を見せるということが一番大事ではないかと思うが、親に対する啓発活動、それと併せてＰＴＡに対する啓発活動はされてないのか。

（事務局）

ＰＴＡ教育行政研修会の中で、読書活動をテーマにした協議があり、啓発活動の一つと捉えている。

（委員長）

ＰＴＡの研修会の中で大人の読書活動について話し合ったということか。

（事務局）

はい。また、ブックスタート応援事業のチラシの中にも、親子の読書の大切さ、親の読み聞かせの大切さを記載し配布している。

（委員長）

国の調査によると、月に１冊以上本を読む大人は４人のうち３人です。４、５冊読んでいるのが、５人に１人ぐらいという調査結果がある。しかし、家庭においてはあまり読んでいるように見えない。もっと地域や家庭に対して、親に対する啓発が必要ではないか。その辺り、図書館関係者の方は課題があると思っている。

（委員）

親に対する啓発の１つとして、10 カ月健診の時に行うブックスタート事業がある。子どもに絵本を贈呈する事業で、私たち図書館クラブの方で分担して行っている。本を渡すだけでなく、読み聞かせをすると子どもは喜ぶ、お母さん、お父さんも喜ぶ。「楽しいですね。」と、「こんな遊びでいい。『絵本を読む』とか『きっちり聞きなさい』とか、そんなことはいい。絵を見て楽しむ。子どもがパラパラ先をめ

くっても一緒にめくって楽しむ。そうした中で、本を楽しむという体験をお互いにしてください。」と話をしている。家庭が基本になり、読み書きに触れさせることが大事だと話している。

（委員）

高知市旭地域はお年寄りが多い。そのお年寄りが、幼稚園児に読み聞かせをする場を設けた。お年寄りにはボケ防止、前頭葉の活性化につながる。子どもたちにとっては、１対１の対応ということで自尊感情が高まる。これを保育園だけでなく、小学校にも奨めていこうと考えている。

お父さん、お母さんにも読んでもらいたいが、仕事で忙しい。おじいちゃん、おばあちゃんに読んでもらうという取り組みが始まっている。

【説明】２．地域における子どもの読書活動の推進について

【質疑・応答】

（委員長）

県立図書館は、新図書館の準備のために忙殺されている様子だが、定期的なお話会等は、継続して行われている。物流システムへの影響はないのか。

（事務局）

物流システムは回数を増やし、週４日発送している。新図書館では、毎日行うように計画している。新図書館の基本構想と基本計画に書かれているが、開館後は全て毎日配送する。今は、緊急雇用の臨時職員が配置されており、対応できている状況である。

（委員長）

コミュニティ形成事業については、本山町がモデル事業として選ばれているということか。事業実施は１０月からか。

（事務局）

本山町において、１０月から実施予定である。

（委員）

誰もが利用できる図書館の整備に関して、障害のある子どもや地域に住む外国人の子どもに対する準備は、具体的にどのような状況か。

（事務局）

新図書館での、特に障害者への対応の準備は、まず、子どもだけに限らず、できるかぎりユニバーサルデザイン、バリアフリーな設計としている。ただし、点字ブロックや誘導の手すりについては、病院施設と同等には設置できない。図書館の場合、『ブックトラック』という本を運ぶワゴンを多用することや書庫の配置の関係で手すりを張り巡らすことはできない。そうした中、できるだけ手すりや『ガイドレール』を配置する等、視覚障害の方々への対応として工夫も必要と考えている。

また、図書館のサイン計画については、弱視の方にも対応できるように通常の図書館より大きめの文字にするなどしている。

子どものサービスについては、お話コーナーの横に調べ学習コーナーと親子読書コーナー兼用という

スペースを設けた。小学校の教室１つ分か２つ分ぐらいの面積があり、３０人～４０人の子どもの集団学習や図書館の本を使い学習する時に使える場所である。防音施設も装備し、使わない時は親子読書コーナーという位置づけを予定。子どもの中には、時にすごい金切声を上げてしまうことがあり、保護者が遠慮してなかなか図書館に来れないという声がある。子どもが金切声を上げても他の人に迷惑をかけずに済む場所ともいえる。

【説明】３．学校における子どもの読書活動の推進について

【質疑・応答】

（委員長）

平成２１年の２１名から、今年度は１２１名と支援員を随分増やしたとのことだが、全体の学校にはまだ行き渡らないくらいの人数である。形態としてはどのようになっているか。

（事務局）

当初は、国の財政支援である、『緊急雇用対策』を活用した形態で開始した。この緊急雇用対策も今年限りとなっており、継続的に雇用している市町村と、市町村独自の予算で雇用している市町村と少し輻輳しており、１２１名の内訳については整理がつき兼ねている。市町村の取組に濃淡は出ているが、『私の市町村は学校図書館に対してこれだけ支援していきたい』というところは、それなりの人数を配し、格好ができているのではないかと思われる。

ただ、市町村の財政状況もあり、私どもから補助金を出しても、市町村で対応して雇用できるというところが全てではない。この人数が今のところ精一杯なのではないか。この人数を維持、あるいは少しでも向上させるため、これからも市町村へ働きかけをしていきたいと思っている。

（委員）

この小中学校の図書館に対する支援員が、非常にその学校の読書活動を有効にしている。できればこういう支援員の補助金などを減らさないようお願いしたい。

（事務局）

補助金については、減らす意向は全くなく、継続あるいは増加もしていきたいと思っている。また後の環境整備にも関係するが、市町村の図書館は市町村の予算であり、どのように市町村教育委員会が本気になってとらえてくれるかということは、私どものサインの出し方によると思うが、頑張っていただきたいと思う。

（委員）

香南市は、今年から香南市の図書館に学校と連携できるという形で支援員が配置されている。特に図書館も地域の人しか利用しないというのではなく、学校と連携をとりながら活用が進んでいけるのではないかと思って見守っているところである。

（委員）

高知市では、兼任のところもあるが、全ての小中学校に支援員が入っている。やはり今までは図書担当の先生が朝８時に図書室に行けない。図書室は、図書委員が開けて貸出している状況だったが、今は

支援員が８時より早めに来て開け、放課後も子どもたちへの対応をしている。子どもたちにとっても図書館が居心地のいい空間になっており、図書のことだけでなく、「何か悩みがあるんだよね。」というように、少しお姉さん的な教員とは違う感覚で声かけしてもらっている。そういった形でいい効果が上がっている。ぜひ、市町村で、県下の全部の学校に支援員が配置されればという気持ちがある。

しかし、その支援員には研修権がない。年度の最初に１度研修があるだけである。高知市では横内小学校で月１回ぐらいボランティアの方（元市の図書館の館長等）が講師となり、本の扱い方とか教えてくださるなど研修会を行っている。こういった研修会を支援員対象に、図書館協議会としてもやっていきたいと思っている。

（委員）

高知県学校図書館活動ガイドブックには、学校図書館の基本的な機能、役割のことであるとか、ＮＤＣのことなど、さらに初歩的な基礎的なことから解説されて、いろんな機会に活用されていると思う。このガイドブックについて、意見が寄せられているようであれば聞かせていただきたい。

（事務局）

このガイドブックは、各校に１冊ずつ、学校規模によっては数冊配布。実際のところ配布をしてから２年、３年経つとどこに行ったか分からないといった状況がある。研修会の時になってあわてて探すというような状況があるようだ。

今年度から小中学校課からのホームページからダウンロードをできるような形にした。先生方からは好評で、特に図書担当の先生からは、個人持ちで見られるので助かったという声をもらった。

（委員長）

中味についてのリクエストはないか。

（事務局）

中味については特にリクエストはない。

（委員）

よく活字離れとか読書離れというのが、ちまたで言われているが、実際には、2000 年ぐらいから、小学生・中学生はむしろ読んでいる、増加傾向にあるというデータがある。委員長がおっしゃったように、読む子と読まない子の固定化、二極化と言ってもいいと思うが、そういう現象は実際にあるのか、あるとするならば、学校現場あるいは教育行政は、どのような取り組みをされているのか。

（事務局）

現実的に数値を示せるほどの業績はできてない。現場の方では校長先生がいらっしゃるので、逆に私どもの方もご意見を頂戴したいと思っている。私どもの方ではやはり二極化というか、読む子と読まない子は確実に分かれているのではないかという捉え方をしている。指導者の読書への誘いの仕方というのが非常に重要で、指導者自身の読書体験が豊かでないと、そういう世界には引っ張ってこれないというところに一番の危機感を持っている。

教員自身がどのように自分自身を鍛えるために読書をするか。教員にとっては授業力の向上というのは使命、自分自身のミッションでもある。自分の授業の中から教材研究等含めて、どういった本を読ん

でいけば自分の技量が上がるか、また、子どもたちを豊かな読書の世界に誘っていけるかということを私どもは気をつけて、サインを出す、発信することが大事。しかし、まだまだ弱いところもある。ＮＩＥなどの連携も含めて、ご示唆いただければと思う。

（委員）

小学校については、１、２年生は本当に本が好き。絵本が中心で、字も大きい。やはり３、４年生、中学年辺りから少し分かれてくる。どうしても怪傑ゾロリシリーズのような本からなかなか抜け出せない。図鑑とか虫が好きで、リアル系が好きな子と物語がとても好きな子。それは子どもたちの個性であり、大事にしなければいけないが、多様な本と一度は出会わせるようにしている。印刷をして配布し、学級でいい文章を教師が読む。児童が自分で字を辿りながら先生の読むのを聞くということを取り入れている。耳から入りにくい子どもを目からもう１回誘い、その中で、先生が「こういう本は面白いよ。」とつなげる。

また、図書館でも今年から、１回１冊しか貸してなかったのを、２冊貸すようにした。１冊では虫が好きな子、動物が好きな子は図鑑等を借りる。それはもちろん借りていい。「もう１冊は朝の読書や何かの時にすぐ読めるような読み物を借りなさい。」と指導している。図書館には支援員がおり、図鑑を２冊持ってきたら「１冊は読み物に換えたら」と声をかけるようにしている。２冊を貸し出しすることで、できるだけ文学作品にも誘える。しかし、子どもたちの個性は生かす。このように個々の学校がそれぞれ取り組んでいる。

（事務局）

依然として学力学習状況調査では、『学校図書館を利用する』、あるいは、子どもたち自身が『読書が好き』という数値は、高知県は高い。土台、土壌としては非常にいいものを持っている。私たちが子どもと向き合い、一体となり、読書ができていける取組をしなければいけない。読書が好きなのに、うまくマッチしなければ、やがて枯れていく。そういうことになってはいけない。強みをどのように生かすかということを、もっと私どもも真剣に考えていかなくてはいけないと思っている。

（委員）

やはり読まない子、全く読まない子をどうしていくのか、幼児期にブックスタートがあるように、いつでもブックスタートできるように、小学校でも中学校、高校でも、環境づくり、仕掛けが大事。私自身が小学校から中学校まで全く本を読まなかった子どもだった。それがあるちょっとしたきっかけで読むようになった。そういった機会をどれだけ大人が提供してあげるかということが大事だと思う。きっかけさえ掴めば、あとはどんどん読むもの。そういった仕掛けができたらいいと思う。

【説明】Ⅱ．子どもの読書活動を支える環境を整備するために

【質疑・応答】

（委員）

教職員等の学校図書館活用能力向上について、５年次研修ですることはなかったのか。初任者の後は、10 年次なのか。

（事務局）

若年教員育成プログラムの中で、初任者は法定研修になっている。その後、２年目、３年目、４年目まで毎年研修がある。５年目の方々は企業研修。その後はまた10年目が法定研修になっている。

読書活動の講座を取り入れているのは初任と10年となっているが、他の年次でも、特に教科研修があり、教科研修の中で学校図書館を活用した授業が講座の中にある。

【説明】Ⅲ．子どもの読書活動を総合的に推進するために

【質疑・応答】

（委員長）

高等学校におけるキャリア教育に位置付けた読書活動の啓発・推進はどのようになっているのか。

（事務局）

自分の学んでいることから発展した内容へ広げる図書等というものに生徒が興味を持つように教員が働きかけたり、具体的に小論文指導の中で、教員の方からこういう本を読んでおくことがいいのではないか、こういう本を読むことによって、自分の発達に向けた取り組みにつながるのではないかというようなアドバイスをしたりしている。

また、時間割にはないが、道徳教育というのは高等学校でも充実しなければいけない。読書活動を通じて子どもの道徳教育の充実にもつなげている。取り組みの方は朝の読書であるとか、教室の中に学級文庫のようなものを置き、休み時間に自由に触れられるといった形で啓発の方は進めている状況である。

【全体を通しての質疑・応答】

（委員）

読書活動に関わって、今、タブレット、電子書籍が話題だが、県教育委員会として、その取扱いについてはどのように考えているのか。

（事務局）

電子書籍の取扱いについては、深く議論したことはない。南国市で企業と連携して１校が取り入れているが、まだ、他には取り入れ希望はない。教育センターでは、研修を行っていると思うが、連携されていない。この分野に関しては遅れていると言わざるを得ない。県立学校が取り入れるのではないか。

（委員）

特別支援学級でタブレットを入れたいと考えているようである。一部の公立図書館で推進しているところもあるが、業界としては制度設計の段階でありこれからである。学校はその後であろう。

ＮＩＥ推進室ができ、プロの方の研修が受けられ先生方も喜んでいる。大変感謝している。

（委員）

県教育委員会の取組の中にＮＩＥ推進を入れていただいたこともあり、出前講座などの依頼は、昨年の1.5程度となっている。

（委員長）

今回の協議会では、「第二次高知県子ども読書活動推進計画」における今年度の取組の進捗状況の確認を行った。

子どもを自主的な読書活動へいざなうために、ブックスタート事業等における本と出会う場づくりの普及・促進、支援員の配置、コミュニティの活用やガイドブック作成など、それぞれの部署の様々な事業での啓発活動によって進んでいることを聞いた。

子どもの読書活動を支える環境整備については、まだまだのようである。図書館の情報センターとしての活用の在り方やＩＣＴ環境の整備（情報データベース化、システム化）等、もっと充実したものにしていかなくてはいけない。

人材育成に関しては、教育センターでの研修が充実している。学校図書館活用力の向上を目指し、公共図書館と連携し、子どもたちの言語力の向上につなげていかなくてはいけないと感じた。教員一人ひとりが指導力を上げ、子どもたちに力を付けていく。そして、地域の住民まで進んでいくことが大事である。

まだまだ課題はあるが、連携しながら取組んでいきましょう。

３．閉会

高知県教育委員会事務局生涯学習課長挨拶